

未来に生きる保育者の 養成を目指して

—保育者養成校の現状から再考する—

松本純子

入学時：「子どもが好き」と憧れだけで十分か

四月、入学したばかりの短期大学一年生に、本学を志望した理由や今後の勉強への意欲について質問すると、多くの学生が「二年間で幼稚園教諭二種と保育士両方の資格・免許が取れる」「子どもが好きなので、子どもにかかわる仕事に就きたい」「担任の先生に憧れ、幼稚園の先生になることが幼い頃か

らの夢だった」などの回答をします。そして、「子どもの目線で考えられる保育者になりたい」「子どもにも好かれる優しい先生になりたい」「子どもや保護者に信頼される保育者になりたい」「子育てに悩んでいる保護者を支える保育者になりたい」と、将来像を描いています。また、幼児虐待や少子化の影響などへの関心も高く、こうした問題に保育者として、どうかかわったらいのかを学びたいという思

いも抱いています。ある意味で、もつともな正論ばかりで、保育者を目指していく若者としてすばらしい姿勢であるという評価もできましよう。

しかし、どの学生に聞いても同じような回答ばかりで、一人ひとりの「自分の考え」がみえてこないという感触があり、新入生を迎える教員としては物足りないところもあります。

また、好きこそものの上手なれとはいうものの、好きという気持ちだけでは職を全うすることが困難であるのが現実の社会です。他の職業を目指す若者と比較すると、なぜか保育者は「好き」や「憧れ」が適性よりも優先されているくらいがあるように思われます。その割には、専門職としての資格を取得することに對しては、大学に入れば卒業時に、もれなくついてくるもののように簡単に考えており、入学目的の達成という安易な流れを危惧するとともに、「幼児教育はやさしい」という世間一般の間

違った認識が、保育者を目指す若者にも浸透しているのではと懸念されます。

授業で…知っている経験していることの違い

学生が生活する環境は、さまざまな情報ツールが手軽に入手でき、利便性・即時性に応えるサービスを誰でもが簡便に利用でき、豊かになったといわれる社会です。その一方で、ゆとりの教育を標榜する学校教育を受けつつ、多くの子どもが塾通いもしているという、少々いびつな社会でもあります。

学生たちは、その影響を非常に素直に反映しているといえます。たとえば、先に挙げた幼児を取り巻くさまざまな社会問題については、どの学生も多くの情報をもっています。また、授業や試験の情報携帯電話やメールで、あつという間に伝達されます。授業で私たちが語る幼児理解や心理学・発達についての学習では、「先生、それは知っています」

と言うことさえあります。

学生が授業で一番目を輝かせるのは、手遊び・絵本の読み聞かせ・紙芝居の方法・子どもへの言葉かけなどの技術・技能についての演習です。なぜなら、演習はやっていて楽しいし、幼稚園や保育所に実習に行った時にすぐに役立つものだからです。実に素直な反応であり、現実的な姿であるともいえます。

しかし、具体的な子どもの姿を事例に「もしあなたがこの子だったらどういう気持ち？」「あなたのこれまでの生活や身の回りのことを思い出して、こういう場合どうしてほしいと思う？」などと聞くと、急に答えられなくなってしまう。直接体験が少なく状況が理解できなかったり、他者の立場に立つてものを考えることが少なくて想像できなかったりするためです。

こうした「知識」と「実践に基づく認識」との差

の大きさは、保育者としての将来を考えると、どうしても埋めてあげたい課題です。そのため、大学ではできるだけ子どもとのふれあいの場を多く設定し、それができなければロールプレイなどの手法を用いての擬似体験であっても、できる限り、体験的な学習を重ねていくように配慮しています。

加えて、立ち居振る舞い・食事の際の箸の持ち方・挨拶の仕方・掃除の仕方なども、こうした体験型の学習を通して大学で教えているのが現状です。幼児期や学童期に、主に家庭でしつけられているはずのことが、実は大学生になっても全くできない学生が非常に多いためです。知識としては知っていても、生活者としての習慣が身についていない、ここにもいびつな構造のひとつがみられます。

実習でーじつくり、責任をもつてかわる

二つの資格・免許を取得するために、学生は幼稚

園・保育所・施設で計五回、通算二か月間の実習をすることが必修になっています。各実習のねらいを明確にし、十分な事前準備をして臨みたいところではありますが、実態は園で実習して初めて生きた子どもの姿に向き合ったり、保育者という職業のやりがいと厳しさを実感している学生がほとんどです。このこと自体はこれでもよしと考えますが、もう少し詳細にみていくといくつかの問題があるのがわかります。

一つは、学生自身に生じる問題です。実習で実践した手遊びや読み聞かせなどが比較的スムーズに運び、子どもにも歓迎された学生は、「保育者としてのやりがいを感じた。保育者としてやっていく自信をもつことができ、絶対に保育者になりたいという思いを強くした」と実習を位置づけます。一方、子どもの前で先生として振舞うことがうまくできなかった学生は「自分は保育者に向いていないと思った」

「園の先生から注意されたが、どうしてよいかわからない」「ピアノが苦手なので、幼稚園の先生は諦める」などの反応をします。つまり、実習を通して初めて学生は子どもにじっくり向き合い、子どもの育ちについて考え、自分が保育者としてどう行動するかを真剣に、そして現実的に考え始めます。しかし、その思考は実習の「でき・ふでき」に左右されがちです。

もう一つは、実習生を受け入れる園側に起因する問題です。大切な子どもとの生活を乱すことが多く、また毎日保育後に反省会をしたり、ふできない実習日誌を読んで指導内容を書き込んだりと、実習生を受け入れることは大変な苦勞をとまなうことです。しかし、多くの



園の先生方から「子どもが興味をもつ手遊びなどの教材を身につけてほしい」「子どもを惹きつける話術を身につけてほしい」「集団を混乱なく指導する目配りを身につけてほしい」などの要望が、学生本人と大学の実習担当教員に対して寄せられます。

確かに、実習生に子どもを預けると、無駄な時間や意味不明の言葉かけが多く、子どもを上手に指導できない場面が多くあるため、こうした要望はもつともであると思います。けれども、実習段階で技術・技能が未熟である学生は保育者として適性がないのでしょうか。卒業後、すぐに園で先生として仕事ができるかどうかを評価基準に、促成栽培の即戦力を求める園の現状に疑問を感じることもあります。

保育者養成校の現実を超えて

こうして、保育者養成校の現状をまとめてみると、改めて保育の現場に何が求められているののだら

うか、子どものために必要な保育者はどのような姿なのだろうか、といった根源的な課題について再考せざるをえません。

本学のような保育者養成校では、幼稚園教諭と保育士の二つの資格・免許を希望する学生が多いことは先に述べた通りです。大学としては学生の要望に応え、資格・免許必修の授業を学生がきちんと受講し、単位を取得することを優先する傾向があります。二年間という短い期間に、五回の実習を実施しながら規定の授業時間を確保するために、義務教育よりも厳しい日程・そして厳格な試験を課しています。そのため、どうしても資格・免許の取得に直結しない一般教養科目は軽視されがちですし、それらの講義を学生が受講することが困難な時間割しか組めません。

また、演習を多くして体験的な授業を進めているとはいえ、その内容が園で役立つ技術・技能に偏っ

ていることは否めません。

こうした状況は、資格・免許を取得して就職できる学生を送り出すためには仕方ないことではあります。目先の目的に向けた対処療法的な方法であることも確かです。

現行の方法は、卒業後三、四年勤めるだけの短期集中型保育者養成とでもいましようか。もし、一生保育者として過ごしていこうという学生を主にした養成方法であるならば、すぐに役立つ保育技術がこれほど求められないのではないでしようか。

まずは、子どもと一緒に生活する中で、子どものことを体験を通して深く知ること、子どもの言動の一つひとつの意味を探索すること、子どもの成育の流れの中で幼児期の教育のあり方を捉えること、自分なりのテーマをもって子どもの観察・分析を続け、さまざまな学問を駆使して子どもの本質に迫っていくこと、そして、子どもとの生活経験を通して

自分について内省を繰り返し、常に学び成長を続けていくこと……子どもの育ちを促し支える保育者の姿を思い描くと、学生たちに、もっとこうあってほしいという思いが沸々と湧き上がってきます。今は、時代の要請という名分に適応するかたちです。めっている大学の教育のあり方も、本来はこうあるべきではないかという視点から、今一度、捉えなおしていくべきであると考えます。

未来に生きる子どもの育ちにかかわる保育者を養成するのですから、私たちも現在に対処するばかりでなく、未来に目を向けて養成のあり方を探っていくことが求められているのではないでしようか。今すぐに役立つ技術・技能の習得ではなく、学生の一見を見通して、一人ひとりの学生の人としての成長を多角的に目指していくことが大切であると考えます。

(東京成徳短期大学)